

序文

有名な富士山を見ずに、美しい島国である日本を去る者は日本に帰国することはないとの伝承がある。私が、戦争勃発直前に横浜から出港した時、暗雲が空を覆い、日本人が無垢・静寂・平和の神聖な象徴だと抱いているこの美しい山を隠していた。私は日本政府によるアメリカ行きの三つの避難船の一つに乗っていた。この避難船は民主主義諸国に対する攻撃を開始する前に、できるだけ多くの日本人をアメリカから帰国させるためのものだった。

この日、富士山が顔を見せることが出来なかったことは重大な暗示だった。富士山が恥ずかしさや悲しさによって隠れているまさにその午後、近衛文麿公爵は合衆国、英国、オランダと平和を得ようとした最後の内閣を辞任し、日本を戦争に導き、その後の島国帝国の運命を決定することとなる政権に道を譲る手続きを完了させていた。

この最後の船に乗った者のうち、何人かは日本に戻るかもしれないが、彼らが戻る日本は我々が残してきた日本ではない。日本から去るのは我々だけではなく、日本自体でもある。それまで平和であった太平洋水域のホノルルと米国艦船への攻撃が我々を目覚ませ、それに続いて潜水艦、軍艦、戦闘機に乗っていた日本人も去っていった。これらのうち、魂だけは今は日本に帰り、他の何千もの魂と一緒に東京にある戦士の霊的な墓場である木造の靖国神社で祭られているのかもしれない。

この晩秋の午後、富士山がその対称的な円錐形の顔貌を暗雲下に隠し続けているまさにそのとき、天皇から帝国の運命を導くことを委任された人々が、この聖なる山が天の守護者として見守っている平和と美のすばらしさを完全に破壊することに決めたのだと思う人がいるかもしれない。そして、富士山が頭部を隠している間に、何千もの20世紀の侍が、最後にその大切な姿を見ることなく、尊い島々を去るのかもしれない。

日本人が故郷や人々と別れるときの言葉には、宿命、悲しみ、誇りの感情が入っている。彼らは「さよなら」と言うが、その意味は「そのように決まっているのであれば」である。それは宿命的な諦めである。この言葉には、富士山によって象徴されている平和は既に見捨てられ、冒険に従事する精神がある。この冒険は島国帝国と、この島国帝国を支配するために天から送られた神への別れなのかも知れない。

しかし、我々は日本国民の最後の別れの式典を施行する前に、彼らのいくつかの美德と、それによってなされた行動を認識し、それに対して敬意を示すべきであろう。現在、奇妙な見解がある。それは、日本は、ナチスの傀儡であり、その行動はナチスによって強いられているというもので、米国と英国で幅広く広がっている。ヒトラーの「日本の無邪気な信仰」に驚き、抗議する記事が新聞に掲載されたが、ヒトラーは日本人だけではなく、全ての有色人

種を破壊しようと考えていた。本当の真実は、日本は我々よりも早くからナチスについて理解していた。彼らはナチスと同じく、人種的支配と侵略をヒトラーが権力を掌握するはるか前から考えていた。ヒトラーが現れる前に日本は満州に攻撃し、国際連盟を脱退し、第一次大戦後の平和的な仕組みを破壊する行動の主導権を正当化しようとしていた。

日本が戦争に参加したのはナチスを喜ばせるためでも、切腹を遂行するためでもない。このアジアの国の行動を説明できるものとして、我々には理解困難な一般的概念がある。日本が太平洋攻撃を行った理由を知るためには日本の「仮面」の裏を見る必要はなかった。日本の閣僚級の官僚は当面の目標をしばしば公表していた。それは、たとえ米国、英国、オランダ領東インドを攻撃する必要があったとしても、太平洋の西半分を支配して、アジア圏を確立することだった。もし、我々が太平洋での攻撃に驚いているのならば、それは日本が何年も前から主張し、行ってきたことを我々が信じてこなかったからに過ぎない。我々は、日本は常に虚勢を張っているのに違いないと自分自身に思い込ませていたのである。

日本は米国務長官に日本が起こりうる攻撃の日時と場所を公式警告として提示しなかったことは事実で、もし、提示されていれば、我々はこの侵略者に対して防御し、彼らをハワイ沖の墓場へ送る準備を進めることができたであろう。しかし、もはや今では、公式警告を提示してからの戦争は行われておらず、時間と供給源が乏しい敵国にとってこのような形式的な戦争を行うことはできない。我々は国際戦争では道德規範がなくなっていることに憤慨し、そのことを受け入れず、ホノルルへの攻撃を「裏切り者」だと強く主張するかもしれない。しかし、この憤慨し拒否したことが、我々が日本のような国が世界の二大軍事力に対して攻撃を行ったのは「裏切り者」であるためであり、それ以外には何もないといった誤った考えに至ってしまった理由ではない。

我々は、残念ながら、あたかも先天的無能者が日本に対して深刻な対応を行って来たかのように、長期に渡り苦しんできた。これが日本に対する正しい評価と、彼らの行動に対する準備が全面的に出来なかった理由である。ハワイだけではなく、米国全体の物理的欠如ではなく、主に心理的欠如の結果として、ホノルルの大惨事が起こったのである。

桜、侍、芸者、紙で作られた家に藁の布団の中で寝る奇妙な小さな東洋人の島である日本のノスタルジックな回想がアメリカ人の心の中に長く残っていた。もちろん、我々は日本で産業革命が起こったことを知っていた。日本人は白人の「野蛮人」から科学を学び、アメリカから多くのものを導入したが、我々は、あまり我々に脅威になるものの導入は許さなかった。このことによって、日本は我々の監視下にあると思っていた。多くのアメリカの技術者は日本に来て工場の改善の手助けをしたが、彼らの全ての知識を日本人に教えようとはしなかった。このことによって、アメリカの優位性は保持された。例え、最新のアメリカの飛行機

がジャップに売られたとしても、未熟な倭国人がその飛行機を離陸させればすぐに壊れることになるだろうと思っていた。このような見方はアメリカの国会議員の心の奥にあり、彼らは東京を地球から吹き飛ばし、一撃で日本戦艦を沈没させるといった報道をして、日本人を恐怖で震わせることを期待していた。日本が儉約して艦隊を作ったとしても、空腹で政治的な殺人者たちがそれを太平洋に進行させて沈没させるだけだ、かのように。

日本の海軍は、他の巨大な海軍と同じように、世界一の艦隊を持っているのだと思っている。しかし、恐らく間違っているだろうし、日本における技術力の一般的な基準からみても、あり得ない。かといって、世界最悪な海軍でもないだろう。日本の海軍将官は開戦前からアメリカとの太平洋での最終決戦があれば日本艦隊が勝利すると確信しており、陸軍将官も陸軍力について同様に信じていた。我々にとっては、このような考えは信じがたいものだった。しかし、東京での決断において重要なのは、我々が考えてもいなかったことを日本人は確信していたことだ。我らの自尊心を傷つけることになるかもしれないが、日本の陸海軍はアメリカの軍力を打倒できると心から信じて実行したのである。

後に、日本人は、ナチスの陰謀や、切腹に熱中している一握りの狂信的な軍国主義者による罪のない犠牲者であったのだと我々が自分に言い聞かせなければならないことになったら、それは誠に不幸な結果になるであろう。後に指摘することになるが、日本は民主主義諸国を攻撃することを長期的に意図的に計画していた。日本は日本にとって最善だと考えて攻撃したのであり、ナチスからの要望に沿ったわけではない。日本はヒトラーの戦略の中での駒であるイタリアとは異なる。日本の軍国主義者は自分自身がナチスと同等ではなく、ナチスよりも優れており、いつの日かナチスと挑み、世界を制圧し、神々から委任された「神聖の使命」を果たすことを願っている。

彼らの目下の目標であるアジアと南太平洋領域の征服は、この使命の一部分に過ぎない。その全貌の把握に失敗すれば、真珠湾以上の破壊的な復讐を引き起こすことになる。民主主義諸国は時間をかけて物理的な優位性を発揮することに成功すれば太平洋戦争に勝利できるかもしれない。しかし、民主主義諸国が日本の軍事力を同定し、排除することに失敗すれば、再び平和を失い、日本が永遠に民主主義を威嚇し、太平洋を乱すことになるであろう。

民主主義諸国は、現在起こった戦争に加わろうとしているが、太平洋を平和的に終わらせる準備までには至っていない。各国は、今、同時期に戦争開始の準備と、勝利が二度と冷笑されることなく、平和を得るために必要な知識を確保するための任務を遂行している。日本の陸海軍は貴族、外交官、政治家と野心的な資本家のグループからの支持を取り付け、このグループはその臆病さと従順性によって、軍国主義者と同等の攻撃性の罪を犯し、太平洋戦争を勃発した。まずは、これが起こった経緯について調べるのが最善である。

JOSEPH NEWMAN

New York City

March, 1942